

## 2022 年度春季大会（成城大学）の記録

成城大学 内田真人

2022 年度春季大会は、2022 年 5 月 14 日（土）、15 日（日）の 2 日間に渡り、成城大学で開催された（成城大学開催は 2008 年 5 月 17・18 日以来 14 年ぶり）。プログラム委員長には慶応義塾大学白塚重典氏にお引き受け頂き、プログラム委員は 29 名の先生方で構成された。

本大会は COVID-19 の状況が不透明な中であって、大会 1 日目は引き続きオンラインであったが、2 日目は 2 年半振りの対面開催で、しかも本学会としては初のハイブリッドによる双方向同時配信にチャレンジした。何分、前例が無いため、会場での 1 週間前の事前システムテスト・機材確認と会場設営に気を配った。また、対面会場では新型コロナの感染予防に気を配り、検温、手指消毒、手洗い、資料配布方法、扉の開閉、質問マイク消毒など大学の方針に沿って対応した、参加者数は事前登録ベースで 400 名（これに当日会場参加が追加）を越えた。このうち地方会員中心に多くの会員がオンライン参加となった。以下では、まず大会の内容をやや詳しく整理しておきたい。

特別講演と共通論題は、ポストコロナを意識して、金融の現状と先行き、そして金融業の抱える課題という幅広い論点を含むテーマに据えられた。特別講演のテーマは「再考：金融システムへの機能別アプローチ」と題して、日本総合研究所理事長の翁百合氏に機能別アプローチの視点の重要性とそれを補完する追加的な視点を踏まえた日本の金融システムについてお話を頂いた。共通論題は「金融の未来」と題して、座長に野村総合研究所の木内登英氏、パネリスト・討論者には 4 名の学者・実務家・コンサルタントを迎えて、変動する新しい金融の理論的整理、情報技術革新やデータの利活用が金融業に与える影響、厳しさを増す地域金融機関のビジネスモデルの将来展望など、多角的で密度の濃い活発な議論が展開された。最後に、座長が「金融の未来についてみなさんそれぞれに考えさせられる刺激を受けることができ、楽しい時間となりました」とブリーフィングしたように、会場で多くのことを学んだとの会員の声が寄せられた。

次に 4 つのパネルセッションについて述べたい。まず、中央銀行パネルでは「金融政策は格差問題とどう向き合うべきか」と題し、アカデミックな学術研究を展望する講演の後、学者・実務家を交えたパネル討議が行われ、チャレンジングな課題について、示唆に富む議論が行われた。また、金融史パネルは「金融エリートとプルーデンスの諸相—歴史的パースペクティブ—」と題して、近代的な金融システムが成立する過程で、金融の専門家集団を果たした役割について、東アジア、国際機関などの歴史的事例を踏まえて議論された。

このほか特別セッションが 2 つ企画された。一つ目は日本証券業協会と日本銀行による特別セッションである。前者は 2021 年度「個人投資家の証券投資に関する意識調査」、後

者は「金融システムレポート」(2022年4月号)を取り上げ、実務家と学者で意見交換が行われた。もうひとつは「歴史にみる貨幣の多様性：近代との接点から」と題し、現代貨幣制度の普及過程について、固有の起源と伝統を有する非欧米社会の視点から興味深い報告が聞かれた。さらに自由論題は8セッションで18の報告があった。テーマは金融政策・制度、国際金融、金融市場といった定例的なジャンルに加えて、新型コロナ、中国があった。

本大会では2日間に亘り、特別講演、共通論題、パネルセッション、自由論題と内容的にも素晴らしい報告が続いた。また、Zoomによるアフターセッションを含め大変内容の濃い議論が交わされた。各セッションの座長・報告者・討論者への的確な人選にプログラム委員会の先生方が尽力された点に対し、開催校として深く感謝したい。さらに、対面での参加者数は約70名(パネリスト含む)と限られたが、久しぶりの実開催を交えた会場でも親交が深められ、今後につながるものとなった。

(白塚重典「学会だより」『月刊金融ジャーナル』2022年7月号,pp108-109より引用)

文責：内田真人(成城大学、大会準備委員会委員長)